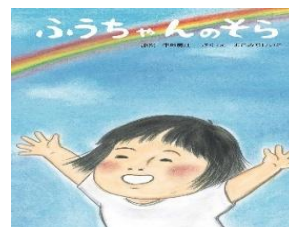




Be Creative !



「評価したいこと、それは、コンセプトの明確さ」

一審査委員長 石崎摂先生

文化祭が終了しました。最優秀賞 1 年 C 組、優秀賞 1 年 F 組、優良賞 2 年 G 組、3 年 A 組、賞を獲得した皆さん、おめでとうございます。閉会式での石崎先生の講評を次年度の取り組みにぜひつなげてほしいと願い、校長室だより文化祭特別号を発行することにしました。石崎先生は次のように述べられました。

1. 企画のコンセプトを明確にし、深める

審査の折には、取り組みの報告書をもとに、企画のコンセプトについて取り組みの説明をしてもらいました。来場者に何を伝えたいのか、そのためにどんな工夫をしたのか、どこで苦労をしたのかなど、生徒の皆さんは丁寧な説明をしてくれました。自分たちの取り組みのテーマをきちんと理解し、それを学級全体で十分に深め、共有したことがわかります。皆さんが事前に提出してくれた企画報告書も大変充実した、読み応えがあるものとなっており、その点は昨年からの大きな前進点でした。



2. テーマに沿って、教室を非日常に



何を作り上げたかということだけではなく、教室全体にその企画に「ふさわしい雰囲気」を作り出していることも含めて「作品」と判断し、評価をしました。テーマに合わせて、普段の教室をいかに「非日常の世界」へと変えていくことができたのかということも、企画を練り上げる時の勝負どころとなります。来場してくださった人たちが、その世界に入り込み、楽しんでくれたかどうか、ここも展示発表としての大事なポイントとなるところです。



3. 表現方法の工夫—舞台への挑戦を！

展示企画のなかには、明確なテーマと共に、豊かなストーリー性を持ったものが見受けられました。「この展示企画を舞台で観られたら」と感じた企画があったのも事実です。だからこそ、発表方法として、何が適切であるかを最後にもう一度問い直すことも、次年度は取り組んでほしいと思います。舞台発表にも挑戦するクラスが生まれてほしいとも思っています。



4. まとめ

まず、1 年生の皆さん、高校に入学して初めての文化祭ながら、よく頑張りました。その健闘を讃えたいと思います。また、体験型のゲームなどもいくつかありましたが、ルールが工夫が見られました。同時に、「お化け屋敷」や「ナイトミュージアム」などと言った暗転を活用した企画が重なる中でも、それぞれのクラスが独自の企画として差別化を図っていたことは大いに評価できます。フォトスポットありきの展示が減った点も評価します。テーマとの関連性の中で、なぜそれが必要かということをも

確にしたスポットにしたいものですね。合わせて、「暗転」に頼ることなく、展示を作り上げてほしいという思いもあります。表現方法を工夫することとともに、皆さんに伝えておきます。

5. 最後に 看板部門の評価

看板部門の評価ポイントは次の3点です。①テーマが表現されているかどうか②作品そのものが丁寧であるかどうか③看板としての完成度。その結果です。最優秀賞 1年C組 優秀賞2年F組 優良賞2年E組

文化祭 2026 まとめ

「文化祭を大切にしたい」という熱い思いが一人一人を「支える人」へと成長させた

一教頭・生活指導部長 今田和弘先生

閉会式の最後に今田先生より語られたことも、ここで紹介をいたします。文化祭のみならず、皆さんの日常生活の中で大切にしてほしいことがいくつか語られました。



1. トラブルを教訓に、一歩前進する姿勢が文化祭の質を向上させる

例を挙げれば、例えばダンス部の取り組み。昨年の観客トラブルを繰り返さないという思いで、対応策を準備しながら、彼らは今年の舞台をやりきりました。軽音楽部も1日目のトラブルを2日目の舞台では起こさせない準備をして、第2体育館のライブを成功させました。舞台のレベルの高さは多くの観客をこの第1体育館に集めました。教室展示や企画模擬店でも同様のことが言えます。その評価は、石崎先生の講評にあった通りです。「来場者の教室での滞在時間が長かった」展示物を



素通りして、すぐに出ていくこともなく、「教室内で観る、楽しむ、学ぶ、取り組む」ことがセットされていたのが特徴です。「うちのクラスの展示を観にきて。」展示を見てほしいという思いがそれぞれの教室にあふれていました。



2. 一人一人が支える人になる

なぜ、このような動きができたのか。そこに「支える側」の働きとその意識の高さがあったからです。注目したいのは、「生徒議会の議論の高さ」「どういう企画が文化祭の成功につながるのか」「もっとこうしたらいい企画になるのではないか」「そのためにどうやって企画を決めたらよいのか」「この議論のレベルで決めてしまっているのか」。時間をかけた真剣な議論がそこにはありました。その議論の結果が、今回の文化祭に生きています。もう一つは、文化祭実行委員会の動き。実行委員は「支える側＝裏方」で



す。文化祭当日も、企画会場入り口での案内、舞台転換のスタッフなどとして責任をもって動いてくれました。演劇部の諸君が、この閉会式の瞬間も照明、音響のスタッフとして動いています。「支える側」の立場の人の意識の高さはもちろんですが、生徒諸君みんながその「支える側」の存在や思いにまで想像力を働かせることができる人間に成長してほしいと思います。



3. 日常の取り組みが大きな企画を成功へと結びつける

外部から本校の文化祭を見にきてくださった多くの皆さんの言葉を紹介します。「この学校の生徒の皆さんは、すれ違う時にみんな挨拶をしてくれますね。しかも目をみて」うれしい言葉ですね。この挨拶は、日頃からやっていないと、なかなかできないことです。こういった一つ一つの日常の積み重ねが、文化祭という大きなイベントで大きな力を発揮します。明日からまた日常の積み重ねが始まります。皆さんが身に着けた力や成果は、皆さんの一生の財産になります。一つ一つレンガを積み重ねるように、一緒に頑張りましょう。